

続・ 珈琲の思い出六

「今日はもうお仕事は終わりなんですか？」

優子に訊かれて僕は

「は、はい。もう終わらせました。え、えーと、優子さんは何時までなんですか？」

優子は腕時計に目をやりながら、

「私も18時までなので、そろそろ上がろうかな、と思っているのですが…」

その瞬間、僕たちの目がまともに合つて、同時に口を開いた。

「じゃあ、もし良かったら…」

「それでは、あの良かったら…」

優子の顔が真っ赤になって、

「あ、ごめんなさい、あ、あの、お先にどうぞ。」

「じゃあ、もし良かったらこの後一緒にお食事でも行きませんか？」

この台詞が僕の口から飛び出したのはまさに奇跡としか言いようがなかった。

優子はほっぺたをさらに赤くして、

「ああ、ごめんなさい！今日はちよつと都合が悪くて…、あ、でも少しだけなら。」

僕はそこでさらに勢いこんで尋ねた。

「それなら、お茶でもいかがですか？」

「は、はい!!ぜひお願いします!!」優子が満面の笑みを浮かべた。「あの、上司に

ちよつと話をしてから、すぐに行きますので、先に行つてもらえますか？」

「それなら、その駅ビルのスタバでもいいですか？」

「わかりました!10分以内に参りますので必ず待つて下さいね!」